

茅科高原は、小津安二郎
 監督がコンビを組むシナリ
 オライター野田高梧と共に、
 高原の生活を愉しみながら数々の名作を生み出
 したゆかりの地です。小津監督が亡くなった今
 でも、小津映画に対する評価はますます高まり、
 世界の映画人に大きな影響を与え続けています。
 毎年11月上旬にはこれを記念して、小津安二
 郎記念・茅科高原映画祭を開催しています。



ご案内



交通

- 列車利用 ○新宿ー(JR中央本線)ー茅野駅ーフル平
○名古屋ー(JR中央西線)ー茅野駅ーフル平
- ※茅野駅よりバスにて約30分、フル平下車約1分
- 車 ○中央自動車道諏訪I.C.降り、ビーナスラインで約30分

野田高梧と小津安二郎

1957年の「東京暮色」、1958年「彼岸花」、1959年には「お早よう」、「浮草」と、野田と共に茅科で脚本の構想を練り執筆するようになって、5作品目の1960年の作品「秋日和」を書き上げ、6月3日に茅科を離れて以来、12月28日野田夫妻と共に久方ぶりに茅科入りした。

小津安二郎が年末年始を茅科で過ごすのははじめてのことである。

次回作「小早川家の秋」の仕事を控えての事だが、のちに野田の語るところによると、小津の母あさ系が、前作「秋日和」の疲れと、正月の来客のために飲み過ぎる小津を気遣って、年末年始を茅科で過ごす野田夫妻にこっそりと、茅科へ連れて行ってくれるよう頼んだのだという。

野田と小津は脚本家と映画監督という間柄にとどまらず、まさに親友、盟友であった。

小津安二郎プロフィール

1903年12月12日、東京深川(江東区)に生まれる。小学生の時に父の故郷・三重県松阪市に移る。伊勢市の宇治山田中学校卒業後、三重県飯南郡飯高町の尋常小学校で1年間代用教員を務めた後、帰京。

1923年撮影助手として松竹キネマ蒲田撮影所に入社。1927年時代劇「懺悔の刃」で監督デビュー。戦後は脚本家野田高梧と組み、「晩春」、「麦秋」、「東京物語」といった名作を次々に発表。『東京暮色』以降は茅科高原(長野県茅野市)に盟友、野田と共にこもって脚本を執筆し、晩年の名作を生み出す。

1963年12月12日、60歳の誕生日に逝去。

1957年の「東京暮色」から、1958年「彼岸花」、1959年「お早よう」、1959年「浮草」、1960年「秋日和」、1961年「小早川家の秋」、1962年「秋刀魚の味」までの晩年の全ての作品が茅科で執筆された。

小津安二郎監督ゆかりの

無藝荘

むげいそう

〈お問い合わせ〉

茅科観光協会

〒391-0301 長野県茅野市北山茅科4035

TEL:0266-67-2222 FAX:0266-67-4914

http://www.tateshina.ne.jp

雲低く寝待月出でて、
 遠望模糊、まことに佳境、
 連日の俗腸を洗う。

小津安二郎監督ゆかりの

無藝荘

むげいそう